

ほっとらいん
ふるむ
ほんごう

「マギーズ東京プロジェクト」始動！

患者や家族、関係者ががん向き合い、
対話できる場所をつくるために

がん患者とその家族らを支援する「マギーズセンター」を東京に設置するための「マギーズ東京プロジェクト」が、9月23日、医学書院内の会議室でキックオフミーティングを開いた。

マギーズセンターを設立したのは、英国の造園家だったマギー・K・ジェンクス氏。47歳で乳がんの告知を受け、その後闘病生活を送るなかで「もっと自分で考える時間・空間がほしい」と考え、担当看護師のローラ・リー氏に相談した。1995年に53歳で死去した後、その遺志を継いだローラ看護師を中心に、翌1996年に英国エジンバラに第1号が誕生し、その後英全国各地や香港に設置されている。

マギーズセンターは、がんに直面し悩む本人や家族、医療者などががんに関わる人たちが、がんの種類やステージ、治療方法や療養場所に関係なく、予約せずに利用できる場だ。自然光が入る、明るく開放的な空間で、お茶を飲みながら患者同士で談笑したり、さまざまなアクティビティを行ったりでき、困りごとがあれば制度や医療に関して専門家に相談することもできる。同プロジェクトは、こうしたマギーズセンターを日本にも開設しようと、訪問看護師の秋山正子氏（株式会社ケアーズ白十字訪問看護ステーション・白十字ヘルパーステーション統括所長）とがんサバイバーである鈴木美穂氏（日本テレビ報道局社会部記者）が共同代表となって立ち上げられた。キックオフミーティングでは、共同代表の2

人がプロジェクトに至るまでの経緯も紹介した。訪問看護を通じて「がんを知ったその日からいろいろな情報が届き、病院以外の場所で専門家にも相談できる場があればいい」と思っていた秋山氏は、2008年にマギーズセンターの存在を知ってから日本での実現を志してきた。

一方の鈴木氏は、2008年、24歳のときに乳がんが見つかり闘病生活を送った。「自分の状況が受け入れられないし、その後の人生が想像できなかった」経験から、がん患者支援活動を展開する。2014年にマギーズセンターと秋山氏に出会い、2人とそれぞれの仲間がプロジェクト創設に動いた（詳細はp.976）。

同日は予想をはるかに超える150人以上の医師や看護師、支援者が詰めかけ、活動にエールを送った。共同代表あいさつで、2人は「私は手術後に精神的にも不安定になり、半年間休職した。がんになった人の支援が非常に大切」（鈴木氏）、「医療者の1人として、美穂さんのような人たちを支援したい」（秋山氏）とプロジェクトへの協力を呼びかけた。

建設予定地は東京都湾岸地域に決まっており、寄附によって建設費用などをまかなう方針。活動の様子はインターネットでこまめに報告され、寄附の受付も行なっている。

・マギーズ東京プロジェクト

<http://magiestokyo.org>

<http://www.facebook.com/magiestokyo>